



子どもの立場

著者	朝倉 拓三
雑誌名	教育を考える一言
巻	3
ページ	1-1
発行年	2013-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123958

子どもの立場

1. 教育を考える一言

「教師は子どもの立場まで降りていかないといけない。」

2. 背景

これは大学4年生の中学校での教育実習で、指導教員の先生がおっしゃった言葉です。私は教育実習の2週目で始めて教壇に立ちました。自分なりに精一杯の授業準備をしたつもりですが、様々なトラブルが起きました。具体的には、時間内に授業が終わらない、説明や指示がうまく伝わっていない、発問に対する答えが予想していたものと異なるということなどです。その後の反省会で指導教員がおっしゃった言葉が「大学の先生は理想が高いからな。まずは子供の実態を理解しないと。教師は子供の立場まで降りていかないといけない。」というものでした。

3. 考察

教育は「相手のいる」行為であり、「相手がいる」という意識を持ち続けることが重要です。この言葉はそのような内容を意味したものです。私はこのことを分かっているつもりでしたが、教育実習中にそのことを本当の意味で分かっていたいなかったことを実感しました。教科指導・生徒指導・学級活動・部活動指導・普段の生徒との関わり等、学校で生徒と過ごす全ての時間で、「子どもの立場に立つこと」の大切さを知りました。自分としては当たり前にできることが子どもには出来ないのです。そのような場面が数え切れないほどありました。

私は、外部コーチとして教育実習校の部活動（バスケットボール部）に今でも関わっています。その中で、何十年も小学生にバスケットボールを指導されてきた保護者の方と中学生を指導する時がありました。その保護者の指導を観察していても、「子どもの立場に立つこと」の大切さを痛感しました。私はシュートを指導する場面で「手首のスナップを使って、シュートを打ちなさい」という声かけをしていました。しかし、バスケットボールの初心者には「手首のスナップを使う」の意味が分かりません。一方、その保護者の方は、「ボールに回転をかけなさい」という声かけをしました。そうすると、正しいシュートの打ち方になる子が増えたのです。このエピソードも、「子どもの立場に立つこと」の重要性を示していると言えます。

前田(1999)は「医療現場では適切な診断があつてはじめて適切な治療が可能になるが、「診療→治療」という診断の流れが、教育現場では「理解→指導」である」と述べています。「子どもの立場に立つこと」は教育を行う誰もが分かっているが、誰もが出来ていることではありません。しかし、誰もがやろうとしないといけないことなのだと強く感じます。

文献情報

前田基成・沢宮容子・庄司一子『生徒指導と学校カウンセリングの心理学』八千代出版、1999年